岩手・胆沢城跡（いさわじょう）

1 所在地　岩手県水沢市佐倉河字二月外

2 調査期間　一九八一年（昭56）七月～一〇月

3 発掘機関　水沢市教育委員会

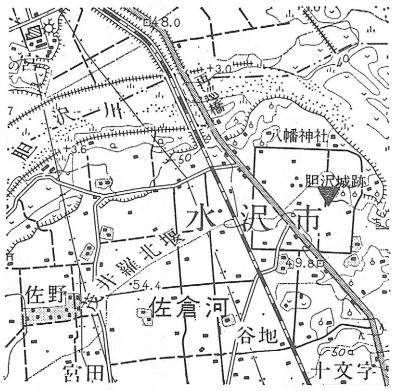
4 調査担当者　伊藤博幸・佐久間賢（社会教育課）

5 遺跡の種類　官衙跡

6 遺跡の年代　九～一一世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

胆沢城跡第三九次調査は内城の北東に位置する「北方官衙」東地区にあたる。官衙北方には域内を流れ東方の北上川に開口する九蔵川があり、今回の調査地区はこの九蔵川上流約三〇〇mの舟窪とよばれる旧氾濫原に面している。



（北上）

検出した遺構は掘立柱建物、柱列、井戸、溝、土壙などでA～D期の四期に大別でき、C期はC_1～C_2期に細分される。A期は九世紀前半の小規模な溝・土壙などで、漆紙文書（延暦二二・二三年具注暦断簡）を出土したSD五九六、SD五七六、SK五五一などで調査区内の大半は空間となっている。B期になると建物が造られ、調査区北西のSB五八一・SA六〇〇、南東のSB五六〇が現われる。C期は一〇世紀前半を上限とし、北廂の東西棟建物SB五九〇を中心にSE五七三井戸をもつ建物で構成される。C_1期にSB五九〇A、SB五八〇、C_2期にSB五九〇B、D期にSB六〇四が属す。

C期のSE五七三井戸中層堆積土から木簡が一点出土した。井戸は深さ二・四mあり、幅〇・四m、長さ一・四m程の板を組み合せた井桁が四段まで遺存している。井桁内の層には水性堆積の非常に薄いシルト層が間層として数枚確認され自然堆積の状況を示した。井戸底に礫が数個みられた他は遺物の出土がほとんどない。遺物は底面にのる最下層から上の各層で、植物種子、加工材などの他、多量の須恵系土器が出土した。土師器、須恵器の伴出はきわめて少ない。各層の須恵系土器の様相に大きな変化は認められなく短期間の埋没と解される。ただ、焼成が還元状態に近いものが多くみられるとともに、外郭南門地区で判明した新らしいグループに属す台付皿の出土を認めない等、須恵系土器のなかでも比較的古いグループと思われる。なお、遺存する井桁から上は人為的堆積で、層中に須恵系土器などの他、漆紙の付着する土師器杯がみられた。

8 木簡の釈文・内容

〔柴カ〕・□田郡白木郷中臣秋×
・進　　(98)×16×6　059

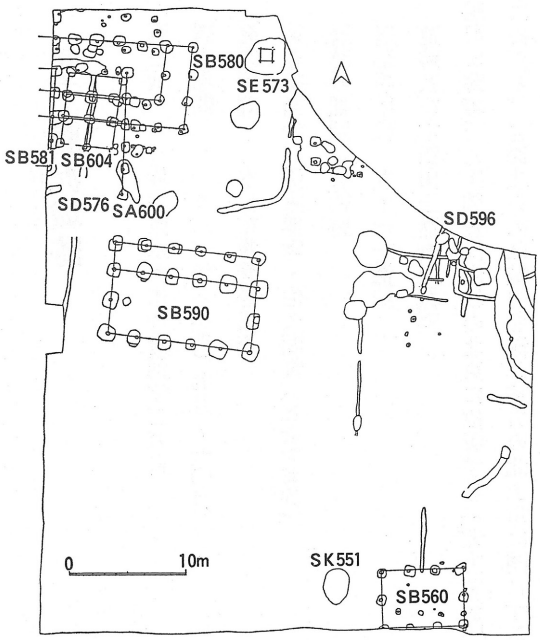
SE五七三中層より須恵系土器と伴出した。四つの破片を接合したもので下端は欠損している。釈文は平川南氏の判読による。

9　関係文献

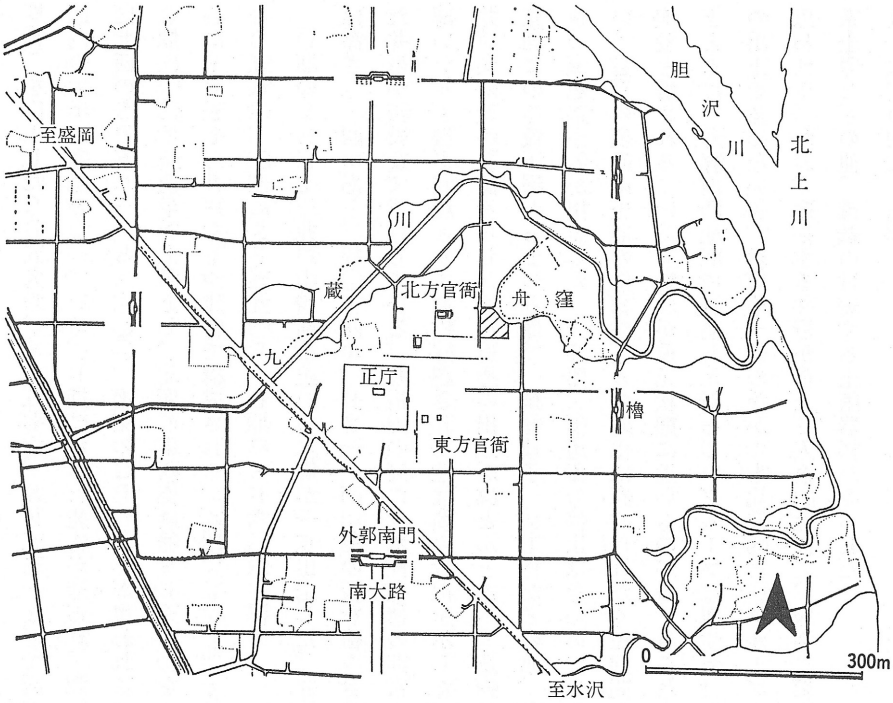
水沢市教育委員会　『胆沢城跡―昭和五一年度発掘調査概報―』　一九七七年

同　『胆沢城跡―昭和五六年度発掘調査概報―』　一九八二年

（佐久間賢）



胆沢城跡第39次発掘調査遺構配置図



胆沢城跡第39次発掘調査区（斜線部）